

三島由紀夫と「卵」

——戦後から経済成長へ——

有田和臣

序

- 一 「ノンセンス」と近代スポーツ
- 二 「栄養食品」としての卵
- 三 高度成長と卵消費
- 四 嘘から真実へ——腕力 of 思想
- 五 戦後から経済成長へ
むすび

三島由紀夫の「卵」は、毎日卵を食べつづけたボー
ト部の五人の学生が、ある日卵たちから裁判にかけら
れ、有罪を宣告されるという「ノンセンス」である。
三島自身の解説によれば、「風刺を越えたノンセン
ス」物語である。しかし、三島が記述した「ノンセン
ス」が、何に対してどのようなノンセンスであるのか
を見ていくことは無意味ではない。この作品で「卵」
は象徴的意味をもっている。

卵は明治維新とともにやってきた欧化の風潮の象徴
とも言うべき食品の一つであった。当時の日本人は、
欧米列強に大きく後れをとった原因の一つが、活力源
としての食物の差にあると考えた。

卵は年毎により多く大量生産されるようになってい
った。やがて日本の鶏卵消費量は世界一となる。卵の
消費増加とともに、日本は高度成長してゆき、つい
には欧米をもしのぐ経済力を身につけていった。「卵」
の学生たちも、自分たちに有罪を言い渡した玉子たち
を、逆に玉子焼きにしてみな食べてしまう。そのよう
な有意味な国民意識をセンスとして、それに対するパ
ロディ的なノンセンスが三島由紀夫の「卵」である。
その後の日本の行く先を暗示しているかのようなこの
作品の中で、卵はその国民的気分を濃厚に反映した象
徴的食品の役割を果たしている。

序

三島由紀夫の短編「卵」は昭和二八年六月、群像増刊号に発表された。毎日卵を食べつづけたポルト部の五人の学生がある日卵たちに拘束され、裁判にかけられて死刑を宣告される。しかし五人の学生は、法廷に集まった無数の卵たちを、逆に大量の卵焼きにして食べてしまう。「卵」は以上のような「ノンセンス」である。

三島自身の解説によると、「風刺を越えたノンセンス」、「純粹なばからしさ」が狙いであったという。「作品自体に主題らしい主題さえなく」、「チェスの選手が味わうような知的緊張の一局、何の意味もない一局を構成すれば足りるのだ」と三島は言う。

しかし、「ノンセンス」は常に「センス」に対してのみ「ノンセンス」でありうる。有意味があればこそ、無意味が成立する。この作品が三島にとって「全く知的操作のみにたよるコント形式への嗜好」が生んだものであったとしても、その創作意識の対極には、三島が有意味としてとらえた何かがあるわけである。

「卵」という作品は荒唐無稽な「ノンセンス」である。しかしこの作品を、いわば裏返して読めば、三島が有意味なものとしてとらえた何かがあらわれてくる。「卵」が興

味深いのは、この、裏返したときにあらわれる有意味なものが、戦後日本の一種もどかしい一時期の状況に対する三島の姿勢をあらわしているからだ。

三島によれば「卵」は寓意小説ではない。しかし、三島の記述する「ノンセンス」が、何に対してどのようにノンセンスであるのかを読もうとすると、この作品は寓意に満ちた作品となる。本稿は「卵」をそのように裏返して読むことを試みるものである。

一、「ノンセンス」と近代スポーツ

「卵」に登場する五人の学生の名は「儷吉」「邪太郎」「妄介」「殺雄」「飲五郎」である。彼らは「飛切朗らかな学生」だ。この五人の名が、仏教の五戒、すなわち在家信者の守るべき五種の戒のパロディであることに、すぐ気づかされる。

儷吉は「友達のことを失敬する癖」がある。邪太郎は「女には目がない男」で、妄介は「嘘ばかりついて喜んでゐる無邪気な若者」である。殺雄は「乱暴者で無類の喧嘩好き」、飲五郎は「稀代の呑み助」である。不儷盜戒、不邪淫戒、不妄語戒、不殺生戒、不飲酒戒のそれぞれを、この五人はことごとく破っている。

また、「卵」の設定には、イギリス文学、および文化と

関連あるものがいくつか見られる。ボート乗りの男の「ノンセンス」物語、という設定は、十九世紀イギリスの名高いユーモア小説、『ボートの三人男』（J・K・ジェローム、一八八九）を思い起こさせる。さらに卵の擬人化は、十八世紀のイギリスの童謡集『マザー・グース』中の「ハンプティ・ダンプティ」を思わせる。この童謡自体は「ノンセンス」ではないが、ルイス・キャロルの『鏡の国のアリス』（二八七二）に、ハンプティ・ダンプティを題材にした、アリスと擬人化された卵とのノンセンスなやりとりがある。

しかも「こういう五人が一緒に住んでいたのだから、界限の騒がしさと迷惑は一通りではなかった」というこの五人の学生は、「端艇部」に属する蜜カラなスポーツマンという設定だ。近代スポーツは十八世紀イギリスで始まった。ボート競技もその中に含まれる。

一九世紀以降、数多くのスポーツ・クラブがつくられ……貴族の子弟が教育を受けたパブリック・スクールでは、一九世紀以降スポーツが大いに奨励された。

……クリケットをはじめ、サッカー、ラグビー、ボート、陸上競技などは、中でも人気があったものである。ただし、「卵」の五人の学生の出自は明らかにされていないが「素人下宿」に住む、あまり裕福とは言えない生活

をしており、高貴な家柄の出とは考えられない。一方、イギリスのスポーツを貫く性格は、「経済的に恵まれた『上流階級の社交』である」ということだ。一般庶民ではなく、生活に余裕のある支配者層のための娯楽として近代スポーツは発展した。それ以前は、一般庶民のためのゲーム・スポーツだったものも、「支配階級」によって近代スポーツ化されていった。

やがて、イギリスでは新しい現象が現われる。支配階級が庶民のゲーム・スポーツに興味を向け、それを規則化するようになったのだ。……同国のスポーツ・クラブは、一七五〇年の競馬を皮切りに、一七五四年のゴルフ、一七八八年のクリケットと、相次いで設立されていく。こうした近代スポーツの幕開けは、産業革命と結びついていた。

産業革命との結びつきとは、次のようなものである。

J・ネフが「量に対するこだわりは、精度への新しい関心が一六世紀後葉にあらわれた西欧に起源する」と述べている。「測定や数量化、正確さなどへの関心と結びついた工業発達と経験物理学の進歩」が、規則化され、多くの人々がいつでもどこでも同じ条件でゲームすることができ、整備された近代スポーツへの志向を生んだのである。量と精度への関心があればこそ、近代スポーツは生まれた、と

言い換えてもよい。

レイモン・トマは次のように言う。

まさに量的なものへの関心こそが、産業システムの出現を可能にするものなのだ。……このコンテクストからみる限り、近代スポーツがなぜ西欧で誕生したのか、容易に理解できるはずである。^(注7)

ちなみに、ボートレースの最初の組織（スポーツ・クラブ）は、一八七九年の“Metropolitan Rowing Association”である。^(注8)「卵」の五人の学生は古い仏教の五戒を破り、新しい近代スポーツを実践する者たちだ。「卵」は、その近代スポーツを生んだイギリスの文学作品にゆかりのある「ノンセンス」である。これらの設定の裏にうかがえる意味を、別の視点からみていく。

二、「栄養食品」としての卵

なぜ「卵」なのか。何に対する「ノンセンス」として、擬人化された卵が題材とされたのか。先に、卵が「ハンプティ・ダンプティ」および『鏡の国のアリス』を思わせる題材であることを述べた。五人の学生の名が仏教の五戒にちなんでいることも述べた。

そして、卵という題材もまた、仏教にちなんだものである。

ヒンズー教と仏教徒は、宗教上の信条から鶏肉や鶏卵を食べない。……インドの仏教徒の間ではそれほど強い忌避は見られないが、チベットの仏教徒は、鶏肉も鶏卵も共に食用にはしない。鶏はその食餌のあさり方から「不浄のもの」と見られており、またその鶏の生むものだから卵も不浄と見られているのである。^(注9)

地域により忌避の強弱はあるが、鶏卵を食することは、仏教ではタブーであった。五人は、五戒を破り、鶏卵不食のタブーも犯す者だ。なぜその必要があるのか。

五人の学生は、この陽気さと朗らかさと傍迷惑の無窮動を保持するために、衛生的な配慮をも怠らなかつた。朝食の際、生卵を吞むのがかれらの日課であった。^(注10)五人が「生卵を吞む」のは、「衛生的な配慮」のためである。衛生的な配慮とはもちろん、滋養強壮のための配慮である。卵を摂取することは明治維新以来の洋風食生活のひろがりとともにひろまっていた。そして洋風食は多くの場合人々に、滋養強壮食としてとらえられてきた。

維新後、加藤祐一が述べた言葉を、まず見てみる。

元来獣肉魚肉など凡て肉類を忌むは仏法から移ったことで、わが神の道にはそのようなことはない。……神代では獣の肉を剥いて衣服にもし、その肉を切つて食用にもしたのじゃ。……神に獣の頭や魚の肉を捧

ぐるのは常のことで、獣肉を食うたとてけがれるいうようなことはないのじゃ。……万物の長たる人じやもの、何食うたとて遠慮はない。^(註1)

「わが神の道」云々は、明治政府の神道国教政策に基づいて行われた、仏教の抑圧・排斥運動、廃仏毀釈を思い起こさせる。欧化政策をとった政府は、一方では神道を国教として位置づけていた。それが、仏教的タブーをとりはらうためのよりどころとなった。

次に、当時の行政当局が洋風食をどのように考えていたか。それをうかがわせるものに、一八七二（明治五）年に敦賀県庁が出した次の論旨がある。

牛肉の儀は人生の元気を稗補^{びほ}し、血力を強壯にする

の養生物に候処……

注意すべきことは、この論旨が養生という言葉で栄養の必要を唱えていることである。これをよりどころにして食生活の洋風化が強調されたのである。この点について、上村行世は、次のように述べている。

……明治の初め、三百年の鎖国の夢から覚めて、欧米諸国の進んだ文化に接した当時の日本人は、欧米列強に大きく後れを取った原因の一つが、活力源としての食物の差にあると考えたようである。そこから当時の知識層である学生たちの間に肉食に対する強い信仰

が生まれ、それが前にも述べたような戦前の学生たちの牛なべ（すきやき）の愛好にもつながっている。^(註12)

洋風食は、欧米列強に追いつくための「活力源」として学生たちに愛好された。右にあげたのは牛肉の例だが、卵も同様であった。明治二年には「読売新聞」が二日間にわたって「鶏卵の値打」と題した記事を連載した。ロンドンの新聞から抄訳したもので、卵は人体に必要な栄養素を最も適量、最も味のよい比率で含み、その料理法は五〇〇以上あつて、世界中これを嫌う国はなく、脳を養うに最適であるばかりか、薬用としても貴重なものであると述べている。^(註13)この頃東京府下の鶏卵問屋は一七〇戸あつていずれも繁盛し、年ごとに増えている。^(註14)

「栄養食品としての卵に対する信仰」について、上村行世著『戦前学生の食生活事情』に、多くの事例が紹介されている。たとえば戦前外交官として活躍した杉村陽太郎の学生時代の生活振りについて、次のような記述がある。

……杉村君のねばりと言えば、試験勉強が有名なもので、一週間ぶつ通しの徹夜をやった。土びんに濃い茶を満たし、生卵を二ダースぐらいそびに置き、はち巻き姿で机に向かう。眠けがさすと一杯、腹がへると一つ二つがぶりとやる。試験は戦場に向かうがごとしという調子で、他人の一ヶ月分は一週間で追いついた。

明治三十六（一九〇三）年ごろ・東京^(注15)

佐々木邦のユーモア小説『地に爪跡を残すもの』には、受験勉強中の旧制中学生に先輩が、次のようなアドバイスを与えているところがある。

「おい、玉子を十ずつ食うことを忘れるな」

「十は食えない」

「いっぺんには無理だけれど、お茶代わりに飲むのさ」

明治四十二（一九〇九）年ごろ・静岡^(注16)

また久米正雄の小説『競漕』には、レースを前にして合宿練習中のボートの選手が牛なべに卵を五つ、六つ入れて食べる描写があり、大正末ごろの東京女高師（お茶の水女子大の前身）卒業生の回想談には入学試験当時の思い出として、生卵への言及がある。

久野は少しく浅ましいような思いで皆の飯を食うのを待っていた。二番を漕いでいる早川なぞは久野の目の前で何とか申し訳を言いながら七杯目の茶わんを下婢の前に出した。そしておまけに卵を五つ六つ牛なべの中へ入れて食べた。

大正四（一九一九）年ごろ・東京^(注17)

……長時間汽車に乗っていたため、のどが痛くてたまらなかつたのですが、翌朝は試験、生卵をいくつか飲んでがんばって出かけ……

大正十（一九二一）年・東京^(注18)

経済的に貧しく自炊生活をしている、昭和の初めのある東大生をモデルにした小説『秀才』には次のような叙述がある。

……鶏卵は最も安価にして最も滋養ある食料品の一つである故に、一日に一個ないし二個の鶏卵は必要物である、というふうな長島君は一流の精密な分類法をもつて必要不必要の境界線を厳密に規定し、自己の物質生活を最低必要の限度に圧縮するに成功していた、というよりもそうせざるを得なかったと言った方が本当かも知れない。

昭和初期・東京^(注19)

以上から、明治維新後の日本人は一貫して、一種の「信仰」をもって、仏教的信仰においては食することがタブーとされる卵、特に生卵を「栄養食品」と考え、食に供してきたことがうかがえる。それは、仏教的戒律のタブーをも破らせる力をもった信仰であった。

三、高度成長と卵消費

農林水産省「食料需給表」によると、昭和九年（十三年）の国民一人当りの供給純食料としての鶏卵は二・三キログラムである。それが昭和三五年では六・三キログラムに伸びている。およそ二・七倍の伸びである。さらに昭和四五

年では十四・五キログラムと、大きく伸びる。それ以降、昭和五年は十四・三キログラム、平成二年は一六・五キログラムと、卵消費はわずかに減少しているか、あるいは伸び率が低い。

他の食品ではどうか。同需給表によれば、昭和十一年から平成二年までのあしかけ六五年間で、動物性食品は全体として九・五倍という驚異的な伸びである。内訳を言うと、肉類は十三倍、鶏卵は七・二倍、牛乳および乳製品は二五・二倍の伸びを示している。それに対して和食につながる魚介類の伸びは三・九倍という低い伸び率にとどまっている。

……全体を通じていえることは、この六五年間に食生活の洋風化につながる小麦の粉食（パン・めん）と、果物、肉・乳・卵および油脂が大きく伸び、これとは逆に、和風食につながる米や大裸麦、さつまいも、魚介類の地盤が大きく沈下したということである。^{（注）}

卵の消費率が伸びたということは、日本人の食生活が洋風化したことを表している。内訳のみを肉類、乳製品と比べると、卵の伸び率は低いように見える。しかし、先進諸国の食料摂取量と比較すれば、卵こそが食の洋風化の象徴であることがわかる。

肉類、牛乳および乳製品は、平成二年の時点においても、

欧米先進諸国の消費量には大きくおよばない。肉類ではおおむね二分の一から三分の一、乳製品は三分の一から四分の一である。しかし卵のみは、欧米先進諸国のおおむね一・五倍の消費量を示している。肉類、乳製品の消費量は先進国中の最低位であるのに対し、卵については、世界一の消費国となっている。

しかも象徴的なのは、日本人の卵消費が急速に伸びる時期と、日本が高度成長をとげる時期とが、軌を一にしていることである。食の洋風化によって滋養をつけ、西欧先進諸国の産業技術を吸収して経済大国となつてゆく日本の姿が、卵の消費量の推移に象徴されているのである。昭和三〇年代初頭に政府は農業白書で、「おくれた日本人の食生活の洋風化が世紀の課題だ」と強調している。日本が高度経済成長をとげるのはその直後である。

食生活の洋風化とともに、日本の産業は急速に発展した。古い習慣を捨て、活力源となる新しい習慣をとり入れることで、日本は欧米をものぐさを手に入れていくことになる。卵消費量が世界一となるのと軌を一にして、日本は経済力においても世界を制するようになってゆく。

「卵」が発表されたのは昭和二十七年であり、そのような状況が展開する前夜ともいえるべき時期であった。「卵」は、それが発表された後の日本の動向を予言するかのようなス

トリーをそなえていると言つてよい。

「卵」に、五人の学生が端艇部の先輩の家でご馳走になるくだりがある。五人に供された料理は、「象の胡麻和えだの、目高の刺身だの、猫の空揚げだの、黒い金魚と金魚藻に水すましを二三疋あしらった高雅な羹だの、麒麟の頭のぶつぎりの甘露煮だの、口につくせないほどの結構な山海の珍味」であつた。どれも常人の口には合いそうにない怪しげなものばかりだが、注目したいのはこれらがすべて動物性食品だということだ。

五人は食において旧来はタブーとされてきた卵を呑み、怪しげな獣肉をふんだんに食べる。こうして彼らは「陽気さと朗らかさと傍迷惑の無窮動を保持」している。洋風の食事によつて彼らは滋養をつけ、常人の域を超えた「活力」を手に入れているわけである。

さらに卵の反撃に遭つた彼らは、その無窮動の活力を発揮して、卵たちを返り討ちにする。返り討ちにされた卵たちは、今度は生呑みではなく、卵焼きにされて五人の毎朝の食卓にのぼることになる。^(注20)

五人は旧来の食習慣にとらわれない食事で「無窮動を保持」する。五人が毎朝食べる卵は、食の洋風化と日本の経済成長を象徴するものだ。さらに食の洋風化は、端艇部という近代スポーツを行う場に属する五人の位相ともマツチ

している。近代スポーツはイギリスで生まれた、産業革命にともなう「量と精度への関心」の産物だった。

ここで再び近代スポーツの歴史にふれておく。日本においては、幕藩体制が崩壊し、天皇制近代中央集権国家が始動すると、スポーツもかつてない大きな変化を経験する。変化とは、「洋式スポーツ（近代スポーツ）の受容と伝統スポーツの変容」である。

……明治の維新国家が展開した欧化政策の副産物として、ヨーロッパとアメリカから洋式スポーツが日本にもたらされた。それは新政府に招聘されたいわゆるお雇い外国人と洋行帰り組によつてはたされたものであつたが、東京大学の英語教員ストレンジが陸上競技とボートを、慶応大学の英文学教員クラークがラグビーを、体操伝習所の初代所長リーランドはボート、フットボール、テニスを教え、また鉄道技士の平岡熙は、アメリカから帰国後、わが国初の野球チーム「新橋クラブ」を創るといった具合であつた。^(注22)

こうして日本にもたらされた近代スポーツは、次のようにして日本に定着していった。

洋式スポーツの移入窓口にはさまざまな種類のものがあつたが、わけても頻繁で持続的で、そして洋式スポーツの日本定着に大きい役割を與たしたのは学校で

あった。学制発布（明治五年）後の諸学校、わけても
大学・高等師範学校・旧制高校など高等教育機関から、
まず近代スポーツは浸透を始める。^(註23)

近代スポーツは「学校」、しかも「高等教育機関」を媒介として日本に浸透した。「卵」の五人が「学生」であることは、右の経緯に符合している。

支配者層のための娯楽であり、産業革命をささえた思想の産物である近代スポーツを行ない、しかも強大な力をもって日本に開国を迫り、太平洋戦争において日本を敗戦に追い込んだ欧米風の食事をとりいれることで、五人は「無窮動」を、そして卵（欧米）の反撃を撃退するほどの活力を保持しているのだ。

四、嘘から真実へ——腕力 of 思想

「卵」のストーリーで気になるのは、妄介の「嘘」である。

彼の嘘と来たらすばらしいものだ。お日様は東からのぼり、お月様も東からのぼる、俺がこの目で見たから本当だ。なんて平気で言うのだ。俺は今日、年とったおじいさんを見たよ、俺がこの目で見たから本当だ、
なんて言うのだ。^(註24)

妄介は西欧の文献にも通じているらしく、「プルトーク

英雄伝」のくだりまで登場する。妄介の嘘は、われわれの常識では、嘘ではない。しかし残りの四人は、妄介の「本当」を「嘘」ととらえる。「目引き袖引き、笑いをこらえるのに大童であつた」という調子である。

五人が卵に捕獲され、裁判にかけられた場面でも、妄介の「嘘」は発揮される。

「この床は鉄だぜ」と彼は友に囁いた。友たちは本当にせず、鼻の先でせせら笑って、足を踏み鳴らしてみようともしなかった。^(註25)

妄介の「嘘」は信用されない。

妄介は靈感を得て、いつも嘘をつくときの嬉しそうな口調で友の耳に囁いた。

「おい、見ろよ！ この建物はたしかにフライパンだぜ」

……また妄介の奴め、嘘をついて喜んでやがる、と四人は思った。^(註26)

妄介は「いつも嘘をつくときの嬉しそうな口調」である。彼はいつものようにしゃべっている。われわれの常識からすれば、彼はいつものように本当のことを言っている、ということになる。それなのに、いつものように彼は信用されない。

ところが、いよいよ五人が死刑を宣告されたとき、「あ

との四人も已むなく妄介の嘘を信用することにして「巨大なフライパン（法廷）の柄のほうへ逃げ出し、「五人の体重は、平均三十貫ほどで、都合百五十貫の鍬が柄に下がる」という具合になった。百五十貫といえ、五六二・五キログラムである。

フライパンは見事に引っくりかえり、轟然たる音を立てて数千の卵が雪崩れ落ちた。その音は百里四方までひびき、眠りをさました人々はこのくらげ夜明け前の戸外へ飛び出した。^(注18)

妄介の「嘘」のお陰で、残りの四人も命拾いする。つまり、妄介の「嘘」はこの「ノンセンス」の中でも「本当」に転じてしまう。われわれの常識にとつての「本当」が「嘘」であった「卵」の設定は、最終場面で、われわれにとつての「本当」がこの「ノンセンス」の中でも「本当」である設定に転じている。ここに、「卵」が何に対する「ノンセンス」なのか、を知る鍵がある。

この転換の意味は何か。妄介以外の四人にとつて嘘と見えたものは、実は嘘ではなかった——ということとは、「ノンセンス」と見えるものも、よく目をこらしてみれば、実は「ノンセンス」ではなく、コモンセンスであるかもしれないということだ。嘘と見えても嘘ではない。われわれがどのように常識はずれと見るものであっても、視点や状況

が変われば、それは常識と認識されうる可能性をもっている。常識とは、そのようなあやういものだと言える。文化皇国論を説き、ついには自決して果てた三島の行為について、洪澤龍彦は次のような言葉を残している。

三島氏は、自分の惹き起した事件が社会に是認されることも、また自分の行為が人々に理解されることも二つながら求めていなかったにちがいない。あえていえば、氏の行為は氏一個の個人的な絶望の表現であり、個人的な快楽だったのだ。^(注19)

妄介の「嘘」は、三島自身の言動と重ねられるところがある。たとえば、「卵」には次のような一節がある。

かれらには怖いものがなく、弱者のように夢みたりする暇はなく、賢者のように考えたりしている暇がなかった。五人が五人とも、ボートと自分たちの肉體だけで世界が出来上がっていて、女とか酒とか食物とかは、出前専門の別の世界から、随時取寄せればよいと考^(注20)えていたのである。確信を措いて、世界は存在しない。

これも三島の自解によれば「ばかばかしい」ナンセンスの世界として描かれていることになるが、本当にそうであろうか。三島は後年、林房雄を論じた文章の中で、次のように言っている。

借物の思想を得々と語るくらいなら、思想は永久に外部にあって、その外部の思想へ向つて人をしやにむに推し進める抽象的情熱だけを、語りうるもの告白しうるものと考えたほうがずっといい。又、外部の思想と内部の縛られた信念との同一化に、自尊心のすべてを賭けるくらいなら、自分の内部にはたえざる行動の原理だけを保有して、思想は外部へ隔離しておけばいい。^(註30)

「弱者のように夢みたりする暇はなく、賢者のように考えたりしている暇がな」い、「ボートと自分たちの肉体だけで世界が出来上がっている」「卵」の「ノンセンス」としての五人と、右に「本当」として書かれた、「外部の思想へ向つて人をしやにむに推し進める抽象的情熱だけを、語りうるもの告白しうるものと考えたほうがずっといい」という生身の三島の主張は大きく重なっている。

ぜい弱な「借物」の思想ではなく、たえず自分を「行動」にかりたてる「原理」を、三島は欲していた。「女とか酒とか食物とかは、出前専門の別の世界から、随時取寄せればいいと考えていた」五人と、「外部の思想と内部の縛られた信念との同一化に、自尊心のすべてを賭けるくらいなら、自分の内部にはたえざる行動の原理だけを保有して、思想は外部へ隔離しておけばいい」という三島は大

きく重なっている。信ずるべきは「自分たちの肉体だけ」であり、「たえざる行動の原理だけ」なのである。

「確信を措いて、世界は存在しない」と「卵」は言う。その確信がはたから見て「ノンセンス」なものであっても、それはいつか「本当」に転ずることができる。そのような寓意が、「卵」のストーリーにある。さらに「卵」の中の五人の弁護人である卵、および検事である卵は次のように言う。

「……被告等は、御承知の如く端艇部部員である。かれらが思想を抱いているとは、社会通念上、考えがたい。腕力と言われたほうがよさそうに思われる」

「腕力こそは最初の思想である。もし腕力が最初に卵の殻を割らなかつたら、誰が卵を食用に供しようという思想を発明しえたでありましょう。^(註31)」

腕力そのものが思想であるような五人と、三島が理想化して語る、次の林房雄の肖像もまた、大きく重なる部分がある。

抽象的情熱はたえず彼を推し進めるから、その極限においては、ひよつとすると彼自身が、考えられるかぎり自由な存在、つまり思想そのものに成り変れるかもしれないのだ。

思想を体現し、思想そのものに成り変ることこそ、

林氏の見果てぬ夢であったが、氏の直感はおそらく最初から、こんな体現の不可能をわきまえていた。^(註32)

借物としての外部の思想ではなく、思想することと行為することが一体化しているような、「思想を体現」することを、三島自身が望んでいた。「思想」と「腕力」が一体化しているような「行動の原理」を望んでいた。そしてそれが荒唐無稽な不可能事であるかもしれないことを、一方で自覚してもいた。それでも三島は昭和三〇年から自分の肉体の鍛錬にとりかかる。

「日本の文士は卑弱で青白い顔をしていることを一つの誇りのように思っている。実におかしなことだ」というのが、その頃の彼の口からよく出された言葉であった。^(註33)

「ボートと自分たちの肉体だけで世界が出来上がっている五人は、三島の「見果てぬ」理想を物語っているといつてよい。現実の三島の理想が、破天荒な設定によってもじられ、端艇部の五人として描かれているのだ。

「確信を措いて、世界は存在しない」(「卵」)。嘘とみえる「ばかばかしいもの」も確信によって真実となる。そのような強い思想を三島は望んだ。私の妄語は真実だ、と訴えているかのである。

五、戦後から経済成長へ

卵は食の洋風化を象徴するとともに、日本の経済成長を象徴するものであった。戦後日本の復興は、卵消費量と比例して加速していく。卵を毎朝かかさず食べ、怪しげな肉食を行い、工業化の思想が生んだ近代スポーツ・クラブ、端艇部に属する学生である五人は、近代化に向けて邁進してゆく、活力にあふれる日本を象徴している。五人は、旧来の仏教の五戒を意に介さないどころか、ことごとくそれを破る者だ。

古い習慣を捨て、「外」のものを活力源としてどんどんとりいれる五人は、「女とか酒とか食物とかは、出前専門の別の世界から、随時取寄せればいいと考えていた」。洋風であるうが、宗教的タブーであろうが、そのような外側の意匠は問題ではないのだ。

そうしたものは必要に応じて「随時取寄せればいい」のであり、問題にすべきは「たえざる行動の原理」のみである。それは、「ボートと自分たちの肉体だけで世界が出来上がっている」ような、行動と思想が分かちがたく直結しているような、いわば腕力の思想である。

明治維新後の日本は、廃仏毀釈、神道国教化、欧化政策等をへて、富国強兵を実現した。欧米の力に屈して開国を

余儀なくされた日本が一躍、先進工業国となつてゆく。さらに帝國主義政策をとり、軍事大國化した日本は太平洋戦争へと邁進し、敗戦に追い込まれる。このような歴史を振り返ると、五人のあり方と近代日本の姿は重なつて見えてくる。五人に対する卯たちの裁判は、欧化によつて力を得た日本の暴走を断罪する、戦後の東京裁判を思わせる。日本の「腕力」は、連合国によつて断罪された。

一方、「卯」の五人は卯たちの奇妙な論理によつて死刑宣告を受けるが、それを跳ね返してしまつた。日本にはその力はないのだろうか？ 三島がそのような感慨をこの作品に込めたという確証はない。しかし、昭和二十六年にはサンフランシスコ會議において対日平和条約が調印され、日本は主権を回復する。以後、自由主義陣營の重要な一員として國際社会に復帰することになる。そのような状況の中で、この作品は書かれている。

サンフランシスコ平和条約と同時に締結された日米安全保障条約によつて日本の対米従属が決定的になる。しかし、日本は確実に復興してゆき、断罪された腕力を徐々に回復してゆく。こうした、「卯」が書かれた時点の状況と重ね合わせてみると、欧化政策によつて力を得てきた日本の活力、ついには欧米をもおびやかすほどの国力をつけるにいたつた日本の活力を信じようとする三島の姿勢が感じられ

る。それは、日本が敗戦し、国力の回復もいまだ途上であるその時点では妄語であつても、「本當」のものとして実現する可能性はある。

少なくとも、五人の学生の、食の洋風化、卯への返り討ちは、欧化政策によつて発展を遂げた日本のありかたと、奇妙に符合している。

むすび

卯は明治維新とともにやってきた欧化の風潮を象徴する食品の一つであつた。「当時の日本人は、欧米列強に大きく後れをとつた原因の一つが、活力源としての食物の差にあると考えた」（上村行世「戦前学生の食生活事情」）であり、「滋養食品」としての卯への信仰はすでに明治時代から見られる。

昭和三〇年代初頭、日本政府は農業白書で、おくれた日本人の食生活の洋風化が世紀の課題だと強調した。この時期、鶏卵をはじめとする動物性蛋白質の摂取量は戦前にくらべて大きく伸び、逆に和風食につながる食品群は減つている。消費量が急伸した食品の「ほとんどが欧風飲料であつて、和風のものはまったくといっていいほどみあたらない」（『新版 日本型食生活の歴史』）。

卯は年毎により多く大量生産されるようになっていった。

やがて日本の鶏卵消費量は世界一となる。卵の消費増加とともに、日本は高度成長してゆき、ついには欧米をもしのぐ経済力を身につけていった。「卵」の学生たちも、自分たちに有罪を言い渡した玉子たちを、逆に玉子焼きにしてみな食べてしまう。

欧米に学ぶことによって、欧米を超える。そのような有意味な国民意識をセンスとして、それに対するパロディ的なノンセンスが三島由紀夫の「卵」である。その後の日本の行く先を暗示しているかのようなこの作品の中で、卵はその国民的気分を濃厚に反映した象徴的食品の役割を果たしている。

(注)

- (1) 三島由紀夫『花ざかりの森・憂国——自選短編集——』解説(新潮文庫、昭和四三年九月)
- (2) 小林章夫『イギリス貴族』講談社現代新書、一九九一年十二月
- (3) 織田幹雄・斎藤正躬『スポーツ』岩波新書、昭和二七年六月
- (4) レイモン・トマ著、蔵持不三也訳『新版スポーツの歴史』白水社文庫クセジュ、一九九三年十二月
- (5) J. Nef: La civilisation industrielle (工業化文明), in *Encyclopedia Universalis*, t. 8, p.968
- (6) J. Guilleme: Le sens de la mesure. Notes sue la

protfolioire du sens de l'évaluation athlétique (測定の意味。

運動評価の意味の歴史について), in C. Poicellor: *Sports et société* (スポーツと社会), Ed. Vigot, 1981, pp.57-74

(7) 『新版スポーツの歴史』

(8) P. C. McIntosh: *Sport in society* (スポーツと社会), Watts, 1963, p.63

(9) ポール・フィールドハウス著、和仁皓明訳『食と栄養の文化人類学』中央法規出版株式会社、平成三年二月

(10) 三島由紀夫「卵」(群像 増刊号)昭和二八年六月、「花ざかりの森・憂国——自選短編集——」(新潮文庫、昭和四三年九月) 所収

(11) 加藤祐一『文明開化』明治六年

(12) 上村行世『戦前学生の食生活事情』三省堂選書、一九九二年十一月

(13) 『読売新聞』明治二一年二月二九日〜三月一日

(14) 『時事新報』明治二一年三月三日

(15) 鹿沢敬一「杉村陽太郎君を懐う」(『第三フランス通信』、『戦前学生の食生活事情』所収)

(16) 佐々木邦「地に爪跡を残すもの」、『戦前学生の食生活事情』所収

(17) 久米正雄「競漕」、『戦前学生の食生活事情』所収

(18) 湯沢雅彦「高年令を生きる——お茶の水出の五十年」第二部(『事例的考察』中の「H・Tさんの話」)、『戦前学生の食生活事情』所収

(19) 永松定「秀才」、『戦前学生の食生活事情』所収

(20) 安達巖『新版 日本型食生活の歴史』新泉社、一九九三年八月

(21) レヴィ・ストロースの「料理の三角形」によれば、「生のもの」が自然的であるのに対して、料理したものは文化的な意味をもっている。さらに、料理したものは、火を通したものとそうでないものに分けられる。もちろん、火を通したものがより文化的であり、また、人為的な器具を用いたものがより文化的である。当然のことを言っているようだが、レヴィ・ストロースはこれによって、人々の料理に対する態度と文化に対する態度の間の、潜在意識における共通項を見いだそうとしている。

この三角形にあてはめて見れば、卵がはじめは生吞みされ、最後には卵焼きにして食べられることは、生で取り入れられた洋風文化・文明が、のちにはより人為的に消化された状態で取り入れられるようになる、という寓意を読むことができる。

(Levi-Strauss, c.: *The Raw and the Cooked*, Harper & Row, New York, 1969)

(22) 寒川恒夫「付論 日本のスポーツ」、『新版スポーツの歴史』所収

(23) 同

(24) 「卵」

(25) 同

(26) 同

(27) 同

(28) 澁澤龍彦「三島由紀夫氏を悼む」(『ユリイカ』、昭和四六年一月)

(29) 「卵」

(30) 三島由紀夫「林房雄」(『新潮』、昭和三八年二月)

(31) 「卵」

(32) 「林房雄」

